

リア王の鏡

A Looking Glass for King Lear

石原 万里

福島工業高等専門学校一般教科

Mari ISHIHARA

Fukushima National College of Technology, Department of General Arts

(2013年9月17日受理)

The ending of *King Lear* has been controversial among many critics, directors and actors, because of its absurdity. Even though many Shakespeare's editors have detected meanings and reasons for particular words or phrases in *King Lear*, there have still been many unanswered questions. Among them is a looking glass. In order to test the breathing of Cordelia, King Lear asks for a looking glass but nobody seems to respond. In this paper, the looking glass is considered from the viewpoints of properties and metaphors of glass and stone, concerning a theme of the play: seeing and knowing.

Key words: Shakespeare, *King Lear*, properties, looking glass, imagery

1. はじめに

『リア王』の最終幕は、これまでに多くの研究者、演出家、役者を悩ませ続けてきている。リアにとって、最後の救済はあったのか。リアは、「犬にも、馬にも、鼠にも命がある、それなのに/なぜお前は息をしない？」(5. 3. 305-6)とコーディリアにすがっていたが、最後に「これが見えるか？見ろ、この顔、見ろ、この唇、見ろ、どうだ、そら、どうだ！」(308-9)と叫び、息絶える。¹ コーディリアが生きていると信じて、リアが死んでいったのであれば、救済はあったのか、それとも、コーディリアの死を受け止めることなく絶望して死んだのであれば、救済はなかったと考えるべきなのか。演出家や、役者は、リアの最後をどう考えるべきなのか。

リアの死そのものが、実は大問題であった。大事な娘コーディリアを勘当し、二人の姉妹にすべてを譲り、王としての地位を捨てたリアが、人間とは何かを求める贖罪の旅を経て、最後にコーディリアと和解する。そのあとで、何故、コーディリアとリアが死ななくてはならないのか。『リア王』は、当時、良く知られた物語であり、いくつかの種本となったヴァージョンが存在する。その中で、直接の材源といわれているのが、シェイクスピアの『リア王』の前に書かれたとされる、作者不詳の『リア王年代記』

(*The True Historie of King Leir and his three daughters* 1605年出版)であるが、リアとコーディリアが死ぬことはない。また、ホリンシェットの『年代記』(*Chronicles* 1587)、スペンサーの『妖精物語』(*The Faerie Queene* 1596)、ヒギンズの『王侯の鑑』(*Mirror for Magistrates* 1574)でも、コーディリアは自殺するものの、リア王は復位する。コーディリアが殺され、リアがそれを嘆きながら死ぬ結末は、シェイクスピアだけの結末なのである。さらには、1681年には、ネイアム・テイト (Nahum Tate) による『リア王』の改作が誕生するが、リア王は復位し、コーディリアはエドガーと結婚する。この改作『リア王』は、1838年のシェイクスピア原作復帰まで一世紀以上、英国の舞台上で上演されていた。そのことを考えると、リア王の死が、読者、観客にとって、どれほど受け入れがたいものであったかが分かる。

多くの人がリアの最後に疑問を投げかけているが、私にとっても、長年気になっていることがある。リアが劇終盤で口にする鏡である。「鏡を貸してくれ。/息で面が曇るか霞むかすれば / ああ、それなら生きている」(Lend me a looking-glass; / If that her breath will mist or stain the stone, / Why then she lives.) (5. 3. 259-61) これまでに、数々の『リア王』の上演を見てきたが、鏡がリアに手渡された舞台を

見たことはない。テキスト上でも、鏡が手渡されたことを示す台詞もト書きも見当たらない。それどころか、その数行あとで、リアは「羽根が震えた」と叫ぶ。鏡ではなくて、羽根でコーディリアの息があるかないかを確認したのである。羽根で息を確認するのであれば、何故「鏡を貸してくれ」の台詞が必要であるのか。

本論では、リア王の「鏡を貸してくれ」の台詞が、『リア王』の芝居において担う意味を、小道具としての可能性と、鏡の言葉のイメージの点から、考察する。

2. 小道具としての鏡

2.1 小道具リストの中の鏡

リアに鏡が渡されたかどうかを考える前に、小道具として鏡が用意されていたのどうかを考えてみたい。フランシス・ティーズは、作品ごとに大道具小道具のリストを作成しているが、『リア王』のリストに、羽根は書かれているが、鏡は省かれている。² その一方で、『リチャード二世』のリストには鏡が挙がっている。

リチャード二世はボリンブルックに廃位を迫られ、自分がどのように見えるかを確認するために鏡を要求する。

リチャード：

鏡(mirror)をすぐにここへもってきてもらいたい。
どんな顔をしているか、見たいものだ。
王の威厳の破産した顔をな。

ボリンブルック：

誰か行って、鏡(looking-glass)を持ってこい。

ノーサンバランド：

鏡(glass)がまいりますまでに、この書面をお読みください。

ト書きがなくても、この台詞を読んだだけで、鏡が持ってこられるのがわかる。やがて、届けられた鏡を覗き込んだリチャード二世は、「深いしわ」ができていないことに驚き、「えい、おべっか使いの鏡め」「O flatt'ring glass」と、鏡に八つ当たりして鏡を叩きつけて壊してしまう。³ 小道具としての鏡は、鏡を覗き込んで自己憐憫に酔うリチャードの

姿を観客に見せる重要な役割を担っている。それに比べ、リアの「誰か鏡を貸してくれ」の台詞に応じるものは誰もいない。ましてや、鏡を持ってきたことがわかる台詞もなければ、その鏡を使ってリア王がコーディリアの息を確認めたことを示す台詞もない。

リチャード二世が使用した鏡は小道具として、常に用意されていたのだろうか？シェイクスピアが株主の一人であった宮内大臣一座に対抗する劇団海軍大臣一座の興行主であったフィリップ・ヘンズローの日記(Henslowe's diary)には、小道具のリストがある。⁴ 「ユダヤ人のための大釜」(caudern for the Jewe)は、クリストファー・マーロウの『マルタ島のユダヤ人』のために使われた小道具であろう。海軍大臣一座はシェイクスピアの劇団ではないものの、劇団は『リア王』上演に必要な王冠や足かせを小道具として所持していた。しかしながら、小道具のリストの中に鏡はなかった。

小道具のリストにはないものの、ヘンズローは多くの衣装を宮廷や貴族から調達している。また、ヘンズローは、劇団の興行主でありながら、その一方で、質屋も営んでおり、ベン・ジョンソン、トーマス・ミドルトン、ヘンリー・チャトルなどの劇作家にも金を貸している。ヘンズローの日記の中には、物と金の行き来が記録されていた。質草の中には小道具として、衣装として、劇場で使われたものもあったかもしれない。気をとりなおして、日記をたどっていくと、その中に鏡があった。「鏡に対し、1593年6月2日に、フランスに貸付」(lent vnto france the 2 of June 1593 vpon A Lockinge glasse)とある。⁵ この鏡が舞台上で小道具として使われた可能性はあるだろう。ところが借金をするためにフランスが持ち込んだのは、鏡だけではなかった。ナプキン、布などが持ち込まれ、それらと一緒に値が付いている。鏡だけで値が付いているわけではない。鏡は質草になるだけの価値はあったが、ほんの一握りの人だけが持てるほどに高級で希少なものでもなかったと思われる。鏡が貴重であったなら、『リチャード二世』の上演のたびにに舞台上で割られるはずもないからである。鏡が、ヘンズローの日記の小道具のリストにも上がってこないのは、いつでも簡単に用意できたからだったのかもしれない。

2.2 道化の鏡 vs 虚栄の鏡

リアの鏡について気になった研究者はこれまでも存在する。ここに二つの論文がある。どちらも、鏡のメタファーから、リアの鏡の意味を解き明かそうとする試みである。ひとつは、鏡を道化と結びつけた論文であり、もう一つは、鏡を Vanity (中世のミステリープレイに登場する擬人化された「虚栄」)と結びつけた論文である。

アラン・シクマンは、齒に衣着せぬ発言をする道化を、リアの真実の姿を写し出す鏡であると考え。道化は、「どんな器量よしだつて、鏡に向かえば百面相をするもんだ」(For there was never yet fair woman but she made mouths in a glass) (3.2.35-6)と女性を揶揄している。コーディリアと道化が同じ場面に出てこないことから、コーディリアと道化は同じ役者が演じたとする説がある。リア王はコーディリアの死体を前にして、「可哀そうに、俺の阿呆が絞め殺された！」(And my poor fool is hang'd) (5.3.304)と言っている。愛情をこめてコーディリアを阿呆と呼んでいるという解釈もできるが、二役同役者説を唱える人には強力な証拠のひとつとなっている。シクマンは、この説に基づき、コーディリアと道化の関連から鏡を「道化の鏡」、真実を写し出す鏡ととらえて、リア王が最後に、年老いた人間である自分を見つめることを可能にしたと論じている。⁶

ジョン・ミーガーは、ケントがゴネリルの事を「人形芝居の悪役並みの鬼娘」(Vanity the puppet's part) (2.2.35)と Vanity「虚栄」になぞらえた台詞から、Vanityの所持品である Looking Glass を Vanityの権化のようなゴネリルが腰にぶら下げていたと考える。そして、リアが鏡を要求した時に、舞台上のゴネリルの死体から、鏡を小道具として有用することが可能であったという説を提示している。⁷

どちらの説も、鏡のメタファーとして魅力的ではあるが、リアの鏡の解釈として、多くの人を納得させるだけの説得力を欠いていることは否めない。どちらも、可能性としては十分であるが、可能性に過ぎないのである。ただ、両論の強みは、そこに引用された木版画である。鏡を見てにらめっこをしている道化の顔がある。鏡を見ている虚栄の後ろには悪魔が居て、悪魔の顔が鏡に映っている。腰からペンダントミラーをぶら下げた女性の絵には、1640年

とあるため、『リア王』の執筆時期(1605-6年ごろ)よりも後であるが、なるほど、ゴネリルが身につけていても良さそうである。メタファーとして使われる事ができるほどに、鏡が一般に浸透していたことは確かであろう。

3. 見ることに取りつかれた人々

3.1 glassとstone

私には、鏡に加えて、もうひとつ気になる単語があった。石である。「鏡を貸してくれ。/息で面が曇るか霞むかすれば / ああ、それなら生きてい」(Lend me a looking-glass; / If that her breath will mist or stain the stone, / Why then she lives.)リアは鏡を次の行では、石に置き換えている。リアは石でできている鏡を念頭にこの台詞を言っているのだろうか。アマルガムの鏡は12世紀には作られていたことが分かっている。16-17世紀にはガラスの鏡と石の鏡が同様に存在していたようである。リアの鏡はアマルガムだったのか、石だったのかはわからない。だが、それでも、なぜ鏡を石と言ったのかが気になる。そこに、石のメタファーが重ねられていると考えることができる。石は石像を連想させ、死を意味すると考えることもできる。⁸ また、リアはその言葉の直前で、コーディリアの死を見ても心動かされない人間を見て、「貴様らは石か」と問いかけている。だが、石から私が連想したのは、死でも、心動かされない人間でもなかった。石で思いだしたのは、グロスターの目である

エドガーが父親の「血まみれの眼窩は宝石のはずれた指輪のようにうつろ」(with his bleeding rings, Their precious stones new lost) (5.3.188-9)であったと語る時、くり抜かれたグロスターの目は宝石の石にたとえられている。目のないグロスターを前にしてリアが言ったのは、「ガラスの目玉でも手に入れろ」(Get thee glass eyes) (4.6.166)だったのである。⁹

この繋がりはどういうことだろうか？リア王は鏡(a looking glass)を持ってきてほしいと頼んだ。その鏡である石(stone)が曇るのを見れば、生きていのかどうか分かるからである。一方、大切な石(stone)である目を失ったグロスターに、リア王はガラスの目(glass eyes)を手に入れるようにと勧めるのである。見る、知る、は『リア王』にとって、大

きなテーマのひとつであった。¹⁰ そのテーマに鏡(glass)と石(stone)は密接に結びついているのである。

3.2 グロスターの目

グロスターの悲劇は、グロスターに見る目がなかったことから始まる。グロスターは、エドモンドが隠した(ふりをした)手紙を「見せろ。さあ。何でもないなら、眼鏡も必要ない」(Let's see.—Come, if it be nothing, I shall not need spectacles.) (1.2.35-6)と言って、見て知ろうとする。Nothingの響きは、コーディリアの「何もない」(nothing)とリアの「何もない所からは何も生まれない」(Nothing comes from nothing.)をも響かせる。グロスター親子の物語は、リア王と娘の物語と並行して進んでいくのである。¹¹ グロスターはエドモンドの言葉を鵜呑みにし、エドガーの謀反を信じ込んでしまう。目をえぐられて始めてグロスターはエドモンドに騙されていたことに気がつく。皮肉なことに目が見えなくなって、より良く世の中が見えるようになったのである。グロスターは「私には道などない。だから目もいらぬ。目が見えたころには躓いた」(I have no way, and therefore want no eyes:/ I stumbled when I saw.) (4.1.20-1)と言ひ、エドガーに再び触れることができたなら「目を取り戻したと言おう」(Might I but live to see thee (Edgar) in my touch, / I'd say I had eyes again.) (25-26)とまで言っている。

3.3 見ることに取り付かれたリア

コーディリアへの怒りで真実が見えなくなってきているリアに、注進をしようとしたのはケントである。「失せろ。目障りだ」(Out of sight) (1.1.158)と怒り狂うリアに向かってケントは、「リア、私から目を逸らさずに、私を通してもっとよく見るのです」(See better, Lear, and let me still remain / The true blank of thine eye) (159-60)と食い下がる。Blankとは、的の中心の白い部分であり、ケントは自分がリアの瞳となろうとしているのである。瞳であるケントを追放したリアは、世の中を見る支えを失い、自分の目だけで、自分探しの旅に出なくてはならなくなる。

地位を失って初めてリアは、自分とは何者であるかを問いかける。リアは、「王」と呼ばれることもあれば、「老人」と呼ばれることもある。リアは、

ゴネリルの家来にとっては「奥方様のお父上」であり、道化から見れば、すべてを娘にやっちゃって「今じゃただのゼロ」(an O without a figure) (1.4.183)に過ぎず、「なんでもない」(nothing) (185)ものになっていく。リアが自分は何者かと問えば、「リアの影法師」(Lear's shadow) (1.4.222)と答えが返ってくる。

ゴネリルが自分の供を50人に減らした事を知ったリアは、泣いたことを恥じて、「老いぼれた愚かな目よ、もう一度でも泣いてみろ、お前をえぐりだし、無駄に流した涙ごと大地に叩きつけてやる」(Old fond eyes, / Beweep this cause again, I' ll pluck ye out, / And cast you with the waters that you loose / To temper clay) (1.4.293-6)というが、目をえぐり出すという言葉がグロスターの目につながっているのは言うまでもない。

実際にグロスターが目をえぐり出されるシーンには、目に関する暴力的な言葉が満ちているが、その前にグロスターは、何故リアを逃がしたのかと問いつめられて、「あなたの残忍な爪が気の毒な老王の目をえぐり出すのを見たくなかったからだ」(Because I would not see thy cruel nails / Pluck out his poor old eyes) (3.7.55-6)と答えている。グロスターはこの後、目をえぐりだされるわけだが、グロスターがリアの身代わりになったような印象を受ける。盲目となったグロスターと出会ったリアは、「お前の目は良く覚えている」(I remember thine eyes well enough.) (4.6.132)と言う。

盲人であるグロスターにリアは、「目が無くてもこの世の進み行きはわかるものだ。耳で見ろ。」(A man may see how this world goes with no eyes. Look with thine ears.) (4.6.146-7)と諭し、見かけとは違う本性を見抜くことの大事さを説き、「ガラスの目玉でも手に入れ」(Get thee glass eyes) (4.6.166)そして「けちな策士のように、見えていなくても、見えるふりをするんだ」(And like a scurvy politician seem To see the things thou dost not.) (4.6.167-8)と続ける。そして、グロスターに自分の目をやろうとまで言う。(4.6.172)

リアにとって見て知ることは、認めることでもあった。コーディリアを退けた時に言った言葉は、「私にはそんな娘などいない。そいつの面など二度

と見ることはないだろう」(we / Have no such daughter nor shall ever see / That face of hers again.)

(1.1.264-6)であった。再会を果たした時に、コーディリアはリアに向かって、「私のことをご覧になって」(O look upon me, sir.) (4.7.57) ほしいと懇願する。

コーディリアを見ることで、コーディリアと自分自身を認識したリアではあったが、目障りだとして追放したケントが名乗り出ても、「誰だ、お前は？ どうも目の具合が良くない」(Who are you? / My eyes are not o' the best (5.3.276-7)、「目が霞んでな、ケントではないか？」(This is a dull sight: are you not Kent?) (5.3.279) と、ケントを認識しているのかどうかははっきりしないままである。

ぼやけた視界の中で、それでもリアは、鏡で、または、羽根で、コーディリアが息をしていることを、見極めようとする。リア王は鏡を持ってきてほしいと頼んだ。その鏡である石が曇るのを見れば、生きていられるかがわかるからである。鏡も羽根も、見て知るための手段である。フォリオ版のリアの最後の言葉は、「これが見えるか？ 見ろ、この顔、見ろ、この唇、見ろ、どうだ、そら、どうだ！」(Do you see this? Look on her: look, her lips, / Look there, look there!) (5.3.308-9)である。見ることを人に訴えながらリアは息を引き取る。

「鏡」それもmirrorではなくて、文字通り「見る鏡」であるlooking glassは、見ることに取りつかれたリアが、死の直前に所望して、手に入れることができなかつたものであったのだ。

注

1. 日本語訳は、松岡和子訳『リア王』シェイクスピア全集5 筑摩書房 1997 を使用しているが、訳が拙論の趣旨にそぐわない時には適宜変更した。テキストは、*King Lear The Arden Shakespeare*, ed. R.A. Foakes (1997) に寄る。リア王のテキストに関しては、Quarto 版と Folio 版を別々のテキストとして扱うことが、現代の流儀ではあるが、どちらかを選択すると抜け落ちてしまう台詞が多く、今回は、両方を折衷したテキストを使った。
2. Teague, France, *Shakespeare's Speaking Properties* (Lewisburg, 1991) p.185-6.
3. ドーヴァー・ウィルソンは、リチャード二世の韻文の台詞とボリンブルックの散文的な台詞を比較して、リチャードはおそらく鏡の台詞を文字通りにとられようとは思わなかったのであろうと解釈している。つまり、リチャード三世は比喩的に鏡 mirror で見たいと言ったはずなのに、字句通りに受け取ったボリンブルックが鏡 looking glass を取りに行かせてしまったということである。
4. Foakes, ed. *Henslowe's diary* (Cambridge University Press, 2002) pp.319-21.
5. Foakes. P.113.
6. Shickman, Allan R., 'The Fool's Mirror in *King Lear*', *ELR* 21 (1991) pp. 75-86.
7. Meagher, John C., 'Vanity, Lear's Feather, and the Pathology of Editorial Annotation' in Clifford Leech and J. M. R. Margeson (eds), *Shakespeare 1971 Proceedings of the World Shakespeare Congress Vancouver, August 1971* (University of Toronto Press, 1972. P.244-259.
8. Teague p.147.
9. フォークスは、テキストの注で、ガラスの偽眼が初めて言及されたのは 17 世紀後期であることから、この場のガラスの目はメガネの事を指しているのだらうとしている。
10. 見ることのイメージに関しては、以下の二冊に多くを負っている。Heilman, Robert Bechtold, *This Great Stage Image and Structure in King Lear* (University of Washington Press, 1963) Spurgeon, Caroline F.E., *Shakespeare's Imagery and What it Tells Us* (Cambridge, 1965)
11. シェイクスピアの悲劇において脇筋が存在するのは『リア王』だけである。

Bibliography

- 1) Carson, Neil. *A Companion to Henslowe's "Diary"* (Cambridge University Press, 1988)
- 2) Fitzpatrick, Tim, *Playwright, Space and Place in Early Modern Performance Shakespeare and Company* (Ashgate, Surrey, 2011)
- 3) *Henslowe's Diary* R.A. Foakes (Cambridge University Press, 2002)
- 4) Heilman, Robert Bechtold, *This Great Stage Image and Structure in King Lear* (University of Washington Press, 1963)
- 5) *King Lear The Arden Shakespeare*, ed. R.A. Foakes (1997)
- 6) Meagher, John C., 'Vanity, Lear's Feather, and the Pathology of Editorial Annotation' in Clifford Leech and J. M. R. Margeson (eds), *Shakespeare 1971 Proceedings of the World Shakespeare Congress Vancouver, August 1971* (University of Toronto Press, 1972) P.244-259.
- 7) Shickman, Allan R., 'The Fool's Mirror in *King Lear*', *ELR* 21 (1991) pp. 75-86.
- 8) Spurgeon, Caroline F.E., *Shakespeare's Imagery and What it Tells Us* (Cambridge, 1965)
- 9) Rosenberg, Marvin, *The Masks of King Lear* (University of California Press, 1972)
- 10) Teague, France, *Shakespeare's Speaking Properties* (Lewisburg, 1991)
- 11) Taylor, Gary and Michael Warren eds., *The Division of the Kingdoms Shakespeare's Two Versions of King Lear* (Clarendon Press, Oxford, 1983)